

高岡市埋蔵文化財調査概報第2冊

西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ

1987年3月

高岡市教育委員会

正誤表

西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報 IV 8 ページ

「誤」

勝興寺越中国府指定地

伏木侵食谷

串岡侵食谷

「正」

勝興寺越中国府推定地

赤坂侵食谷

古府侵食谷

高岡市埋蔵文化財調査概報第2冊

西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ

1987年3月

高岡市教育委員会

西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ

序

高岡市の西部の丘陵地帯は、西山丘陵と呼ばれ、その北東端は二上山へと連なり、断崖となって海へ落ち込んでおります。この丘陵の山麓には小矢部川が流れ、その河口が伏木港です。

古墳をはじめ多数の埋蔵文化財が発見されている西山丘陵一帯において、埋蔵文化財分布調査を実施して、今年度は4年目に当たります。今回は、この丘陵の北端部において実施しました。国指定史跡桜谷古墳群の所在地でもある太田地域、そして、国府・国分寺が所在し、古代越中国の中心として栄えた伏木地域です。

分布調査そして遺跡地図作成は、文化財保護にとって基礎をなすものであり、この小冊子がその一助になれば幸です。

今回の調査に当たり、御協力、御指導いただいた、地元の皆様、関係各位に感謝の意を申し上げます。

昭和62年3月31日

高岡市教育委員会

教育長 竹下 外男

例　　言

1. 本書は、富山県高岡市の西山丘陵に対する埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。
2. 本調査は、昭和61年度国庫補助金の交付を受け、高岡市教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、昭和61年4月11日から同年12月23日の実働43日間である。
4. 本調査は、高岡市教育委員会社会教育課文化係主事大野文輝、同文化財保護主事山口辰一が担当した。
5. 調査補助員として下記の者の参加を得た。
上田順子、坂下正美、守護晴津子、砂原優美子、船木悦子、宮下真知子、山崎美保子
6. 現地調査及び報告書作成に当たって、高岡市文化財審議委員占岡英明氏、富山考古学会員西井龍儀氏から、指導・助言を賜った。
7. 本書の執筆は山口が行った。

目 次

序・摘要・目次

I 序 説	1
II 太田地域	3
1. 環境	3
2. 各遺跡の様相	4
III 伏木地域	7
1. 環境	7
2. 古瓦出土遺跡	7
3. 各遺跡の様相	10
4. 遺物	12
IV 結 語	13

図 版 目 次

図版1 道路(太田)	1. 山岸地区遠景(東) 2. 山岸西道路遠景(北西) 3. 山岸西道路近景(北)	図版5 道路(伏木)	1. 伏木地域遠景(西) 2. 伏木地域遠景(南) 3. 上位段丘遠景(東)
図版2 道路(太田)	1. 山岸地区遠景(北) 2. 山岸道路遠景(東) 3. 山岸道路近景(北)	図版6 道路(伏木)	1. 寺山道路遠景(南) 2. 氷多神社参道(東) 3. 氷多神社参道(東)
図版3 道路(太田)	1. 旦保地区遠景(南) 2. 旦保道路遠景(西) 3. 旦保道路近景(東)	図版7 道路(伏木)	1. 越中国分寺跡(北) 2. 越中国分寺跡(北) 3. 越中国分寺跡(東)
図版4 道路(太田)	1. 横谷1号墳(南) 2. 横谷2号墳(東) 3. 国分山古墳群(南)	図版8 道路(伏木)	1. 猛興寺遠景(南) 2. 熊野道路近景(南) 3. 熊野道路近景(西)

挿 図 目 次

第1図 調査対象地区分図(1/15万)	1	第6図 伏木地域地形図(1/175千)	8
第2図 調査対象地位図(1/5万)	2	第7図 伏木地域古瓦出土遺跡(1/1万5千)	9
第3図 道路地図(1), 太田地域—山岸(1/1万)	3	第8図 道路地図(4), 伏木地域(1/1万)	10-11
第4図 道路地図(2), 太田地域—旦保(1/1万)	5	第9図 索引地図(1/3)	12
第5図 道路地図(3), 太田地域—岩崎(1/1万)	6		

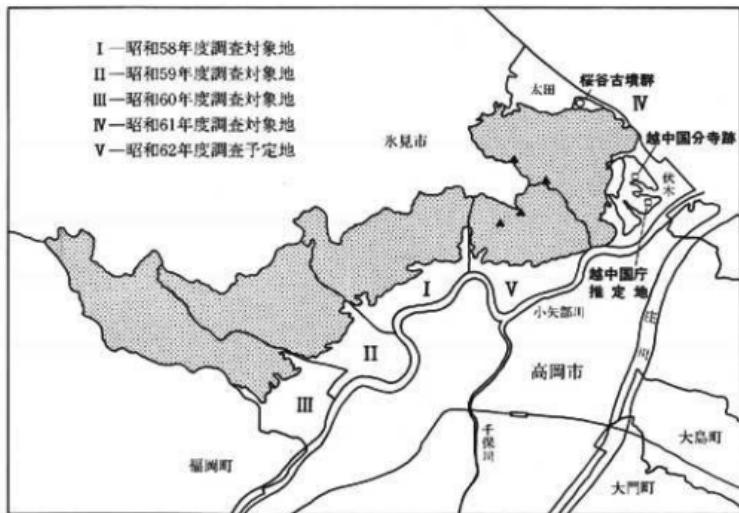
I 序 説

西山丘陵埋蔵文化財分布調査事業の対象地は、高岡市の西部の丘陵地とその山麓一帯である。ここは、小矢部川の北西側、すなわち左岸地域である。南側は福岡町、西側は永見市との市境となる。また北側は富山湾に臨む。

この対象地を主要道路を基準に便宜上 5 つの地域に区分して、1 年度に 1 箇所ずつ実施し、5 年間で事業を実施し終えるように計画した。昭和 58~60 年度において、国道 160 号線南側の 3 地域の調査が終了し、残るは北側の 2 地域となっていた。今年度は 4 年目に当たり、最北部の地域を対象とした。面積は約 1,500ha である。

今回の対象地は地形的に 2 区分される。西山丘陵は北東方へ伸びて二上山へ至る。この丘陵はさらに北へ伸び、急崖となって富山湾へ落ち込んで行く。ここの紅葉谷と称されている所を境として、二上丘陵の北西麓の太田地域と東麓の伏木地域とに分けられる。旧太田村と旧伏木町である。太田地域の西側は永見市となる。伏木地域の南西側は二上地域で、来年度調査実施予定である。

このように、地形的、歴史的に区分されるので、2 つの地域に分けて以下の説明を行うこととする。紅葉谷の東側の尾根は、岩崎鼻灯台のある伏木国分であるが、説明の都合上太田地域の項



第 1 図 調査対象地区分図 (1/15万)



第2図 調査対象地位置図 (1/5万)

に含めた。また、伏木地域の南端部、高美町には古墳をはじめいくつかの遺跡が所在するが、二上地域との関連を重視したことより、次回予定の二上地域において取り上げることにする。このように変則的に扱ったのは、伏木台地における越中国府関連遺跡を重点的かつ明瞭に示したかったからである。

II 太田地域

1. 環 境

太田地域は、高岡市の最北端に位置し、旧太田村に当たる。西山丘陵の北側を占める。北側は富山湾に臨み、東側は二上丘陵が富山湾へ断崖となって落ち込む渋谷崎によって画されている。南側は、二上丘陵の一角を占める大師ヶ岳から派生する丘陵性台地が存在している。西側は迷るものではなく水見平野へと繋がっている。この水見平野には、現在十二町潟としてその面影を止める大きな潟湖が存在していた。布勢の水海と呼ばれ「万葉集」にも詠まれていることは、周知の所である。この湖水が太田地域の近辺にまで及んでいたと想定され、当地域は西方一帯に開かれ



第3図 遺跡地図(1), 太田地域一山岸 (1/1万)

ていた地域と言える。

現代の太田地域の集落は、その立地条件により大きく2つに区分される。山縁集落と砂丘集落であり、前者は、西田・谷内・山岸・貝保の各集落からなり、後者は、伊勢領・中村・渋谷（渋谷新村）・辰ノ口・雨晴の各集落からなる。北東側から南西側へ拡がる丘陵に沿って山縁集落が点在し、北側の海岸砂丘に沿って砂丘集落が展開する形となっている。

2. 各遺跡の様相

1. 山岸西遺跡（第3図）

大師ヶ岳から北方へ延びる丘陵の裾部に位置している。太田自然休養村の直下で、山岸の集落の南西側である。標高8~20mを計る。遺跡の範囲は、南北80m×東西170mである。現況は畑地である。北側は水田で南側は丘陵が迫っている。東南東500mには山岸遺跡が位置している。採集された遺物は、土師器・須恵器である。時期を明確にできないが、古墳時代から平安時代のものである。

2. 山岸遺跡（第3図）

大師ヶ岳から北方へ延びる丘陵の裾部に位置している。太田自然休養村の直下で、山岸の集落の南東側である。標高12~20mを計る。遺跡の範囲は、南北80m×東西210mである。山岸西遺跡が西北西500mに位置するが、これと同様の立地である。現況は畑地で、北側は水田で南側は丘陵が迫っている。採集された遺物は、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器である。以前には縄文時代の石器も採集されている。

3. 貝保遺跡（第4図）

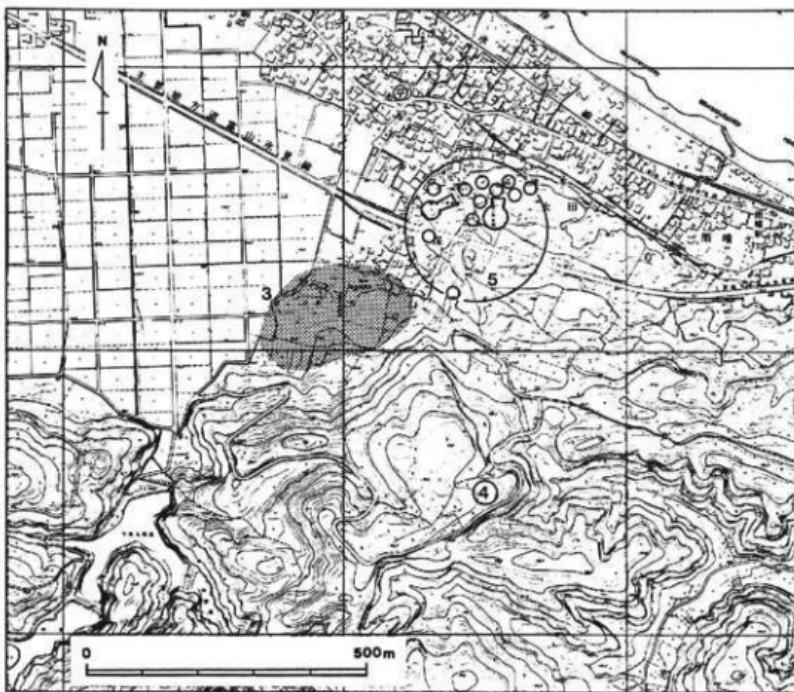
大師ヶ岳から北方へ延びる丘陵の裾部に位置している。貝保の集落の南側に接する地点で、重要文化財武田家を含む一帯である。標高8~24mを計る。遺跡の範囲は、南北160m×東西280mである。現況は畠が中心で墓地等も含む。採集された遺物は、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器である。またこの遺跡の付近より、弥生時代の石斧が出土したとされている。

4. 太田ふどう園付近石器採集地（第4図）

標高約80mの丘陵尾根付近より、剝片が1点採集された。旧石器～縄文時代のものである。

5. 桜谷古墳群（第4図）

2基の前方後円墳（1・2号墳）と11基（3~13号墳）ないしこれ以上の円墳から成り立っている。さらに昭和52年の調査において、箱式石棺が2箇所で確認されている。二上丘陵の北端部の海岸段丘上に位置する。標高18~23mを計る。現況は畠地である。現在は国指定史跡の1・2号墳が存在する他、昭和52年調査の13号墳（52-1号墳）と箱式石棺が道路下に保存されているに過ぎない。主なる古墳の内容は以下の通りである。



第4図 遺跡地図(2), 太田地域一旦保 (1/1万)

1号墳；柄鏡式の前方後円墳、全長62m、前方部幅30・高さ5.45m、後円部径35・高さ6m

2号墳；帆立貝式の前方後円墳、全長50m、前方部高さ1m、後円部径33・高さ6m、石釧4個、紡錘車1個、管玉6個

3号墳；金環、小玉、刀劍、人骨

7号墳；金銅製帶金具、鐵鎌6個体分

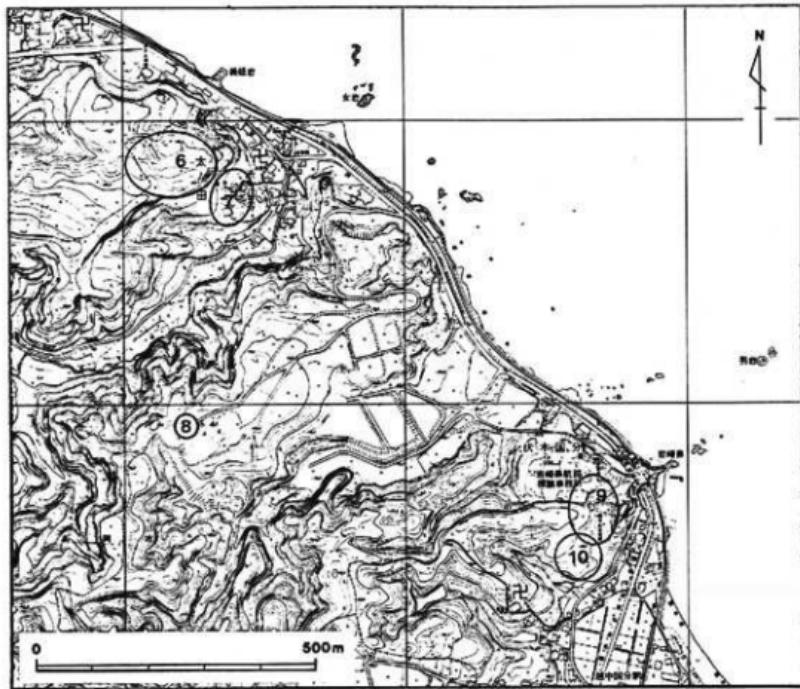
8号墳；石室（石椁）、刀身、刀装具、金環

9号墳；元源訪社古墳、内行花文鏡1面、管玉13個

6. 岩崎御庭先遺跡（第5図）

二上丘陵が急崖となって富山湾へ突き出る台地上に位置する。南西側は渋谷川の谷に臨む。標高は56~60mを計る。旧石器時代の石器、縄文時代の前期後葉の土器が採集されている。

7. 岩崎古墳群（第5図）



第5図 遺跡地図(3), 太田地域—岩崎 (1/1万)

渋谷川河口左岸の台地上に立地する。5～6基の古墳があったとされる。大正12年に工事による破壊の折、調査が行われている。

8. 岩崎遺跡（第5図）

通称紅葉谷遺跡。かつて存在した紅葉谷川に面する台地上に立地する。標高60～63mを計る。紅葉谷工業廃棄物処理場付近から、旧石器時代の石器が採集されている。

9. 国分山古墳群（第5図）

A墳～H墳と命名された8基の古墳で構成されている。二上丘陵の北東端、岩崎鼻台地上に位置する。B・C・D墳の3基以外、消滅して現存しない。これら以外に背後の丘陵尾根上には、古墳状の高まりが2箇所存在する。

10. 岩崎鼻遺跡（第5図）

岩崎鼻灯台下の丘陵斜面である。現況は細地で、かつて縄文時代の磨製石斧が採集された。

III 伏木地域

1. 環 境

伏木台地は、二上丘陵の東麓、小矢部川の河口左岸に発達した河岸段丘である。南北約2.1km、東西約1.2kmを計るこの台地は、西側には二上山の丘陵山地が急崖となって迫り、北東側には海岸平野が、東側には沖積平野が段丘崖を隔て展開している。北西側は加古川によって、南側は矢田の浸食谷によって区画されている。この台地は次のように構成されている。段丘は大きく、上位と下位の段丘によって2区分される。標高14~16mを計る下位の段丘が大部分を占める。下位の段丘には、赤坂侵食谷と古府侵食谷の2つの主要な侵食谷が入り込んで、3区分される形になっている。換言すれば、下位段丘は3つの舌状台地より構成されている。これらを、北部台地、中部台地、南部台地と呼称することにする。

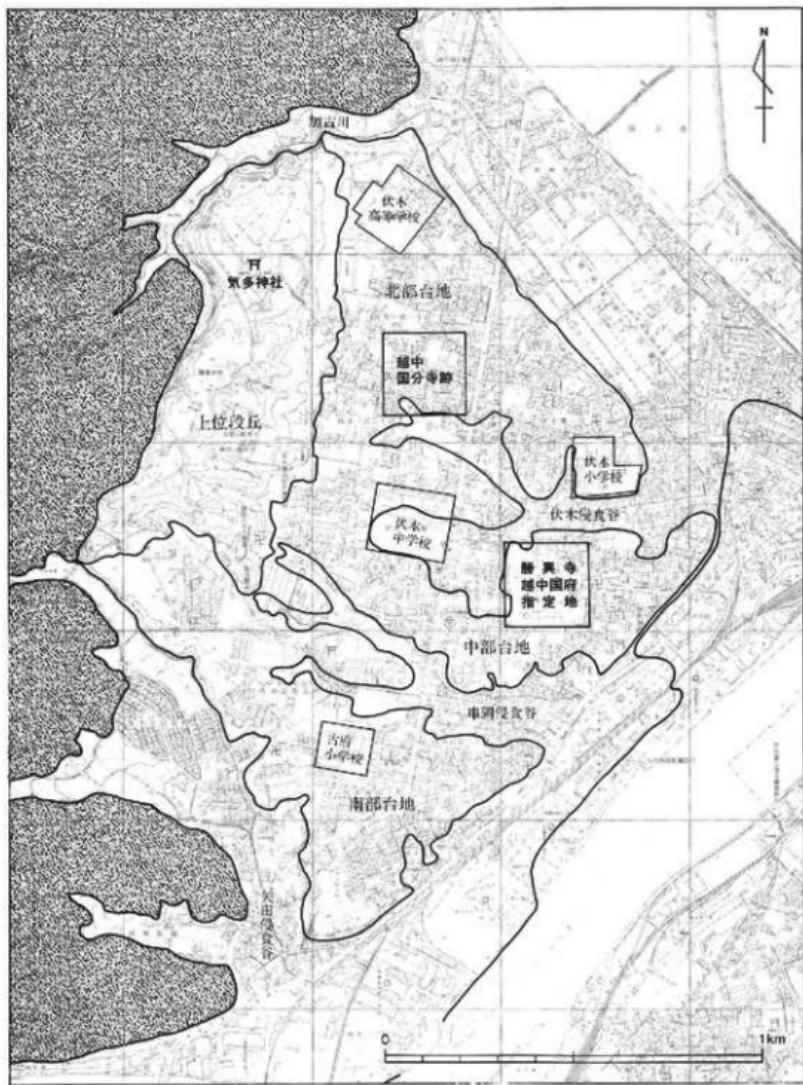
上位段丘は標高50~89mを計り、台地北側には越中一之宮氣多神社が位置している。北部台地は、南東端部に伏木小学校が、北西端部に伏木高等学校が所在している。一宮面と称されている。中部台地は、東側に浄土真宗本願寺派雲龍山勝興寺が、西側に伏木中学校が所在している。北側の赤坂侵食谷から南側へ浅く広い支谷があり、この台地を2区分する形となっている。東側を古府面ないし勝興寺面。西側を伏木中学面と称されている。南部台地は、中央に古府小学校が所在している。古府面と称されている。

以上のような地形上の違い、北部台地に越中国分寺跡が、中部台地に越中國府推定地が位置すると言う。各台地を象徴する遺跡もあり、一応伏木台地を4つに区分して遺跡を把握することにしたい。

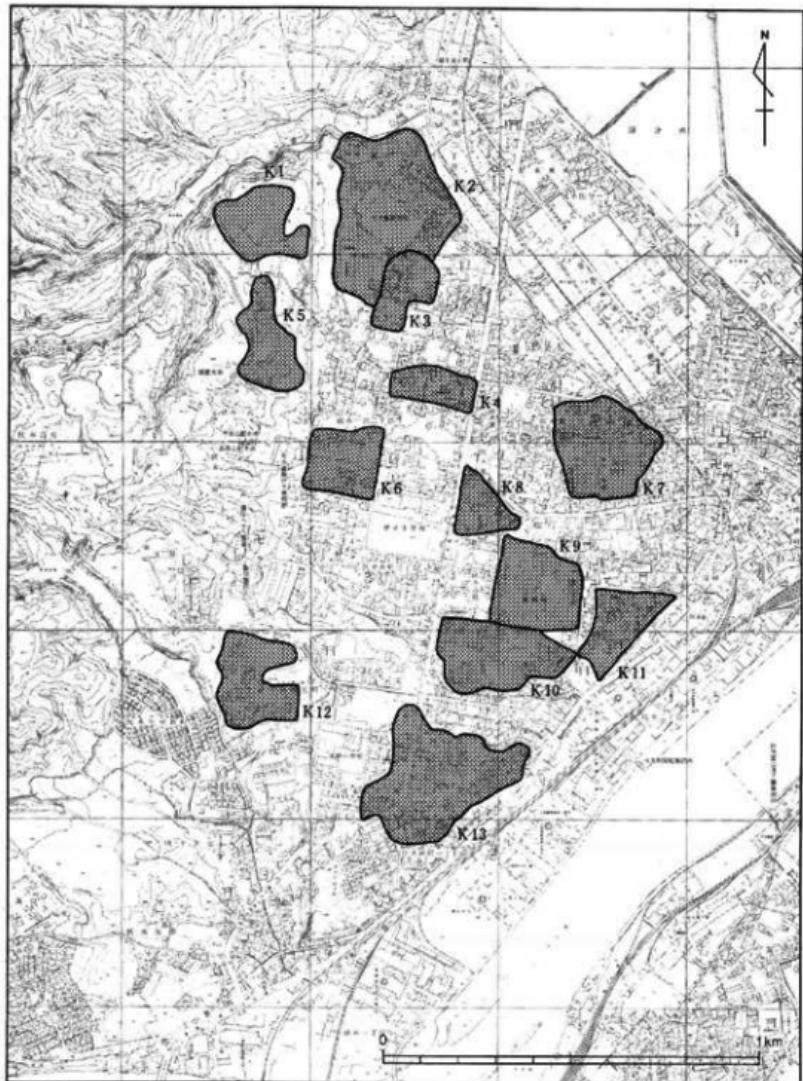
2. 古瓦出土遺跡

伏木台地における古瓦出土地点として、以下に掲げる13遺跡が古岡英明氏によって指摘されている。

1. K 1 - 寺山遺跡、伏木一宮2丁目（一宮字大平）
2. K 2 - 大北遺跡、伏木一宮2丁目（一宮字半加・大北・中北）
3. K 3 - 大門遺跡、伏木一宮2丁目（一宮字大門）
4. K 4 - 越中國分寺跡、伏木一宮1丁目（一宮字國分堂）
5. K 5 - 赤坂山遺跡、伏木一宮1丁目（一宮字赤坂山）
6. K 6 - 熊野遺跡、伏木一宮1丁目（一宮字熊野・赤坂）



第6図 伏木地域地形図 (1/1万5千)



第7図 伏本地域古瓦出土遺跡 (1/1万5千)

7. K 7 - 大立遺跡、伏木東一宮（一宮字大立）
8. K 8 - 大塚遺跡、伏木東一宮（一宮字大塚）
9. K 9 - 大友遺跡、伏木古國府（古府字大友）
10. K 10 - 御亭角遺跡、伏木古府 2 丁目（古府字御亭角・美野下）
11. K 11 - 東館遺跡、伏木古國府・古府 2 丁目（古府字東館）
12. K 12 - 白山遺跡、伏木古府元町（古府字西上野・矢田字平田）
13. K 13 - 鍵取遺跡、伏木古府 1 丁目・矢田上町（古府字上野・竹端、串岡字鍵取、矢田字窪・大塚）

各遺跡やその出土古瓦の内容については、古岡氏及び西井龍儀氏によって『北陸の古代寺院』において詳細に論じられているので、参照されたい。上記の内、御亭角遺跡以外の12遺跡出土の瓦は、奈良時代後半頃のいわゆる越中国分寺期瓦が主体を占める。量的には、寺山遺跡、熊野遺跡、鍵取遺跡から多く採集されている。御亭角遺跡からは、越中国分寺期瓦以外に、白鳳時代前期頃とされる瓦が採取されている。なお、これら古瓦出土地点を、古岡氏の御教示に従い第7図に示した。

3. 各遺跡の様相

上位段丘

北側と南側は、加古川と矢田侵食谷で区画される。西側は二上山の丘陵山地が迫り、東側は下位段丘を臨む。

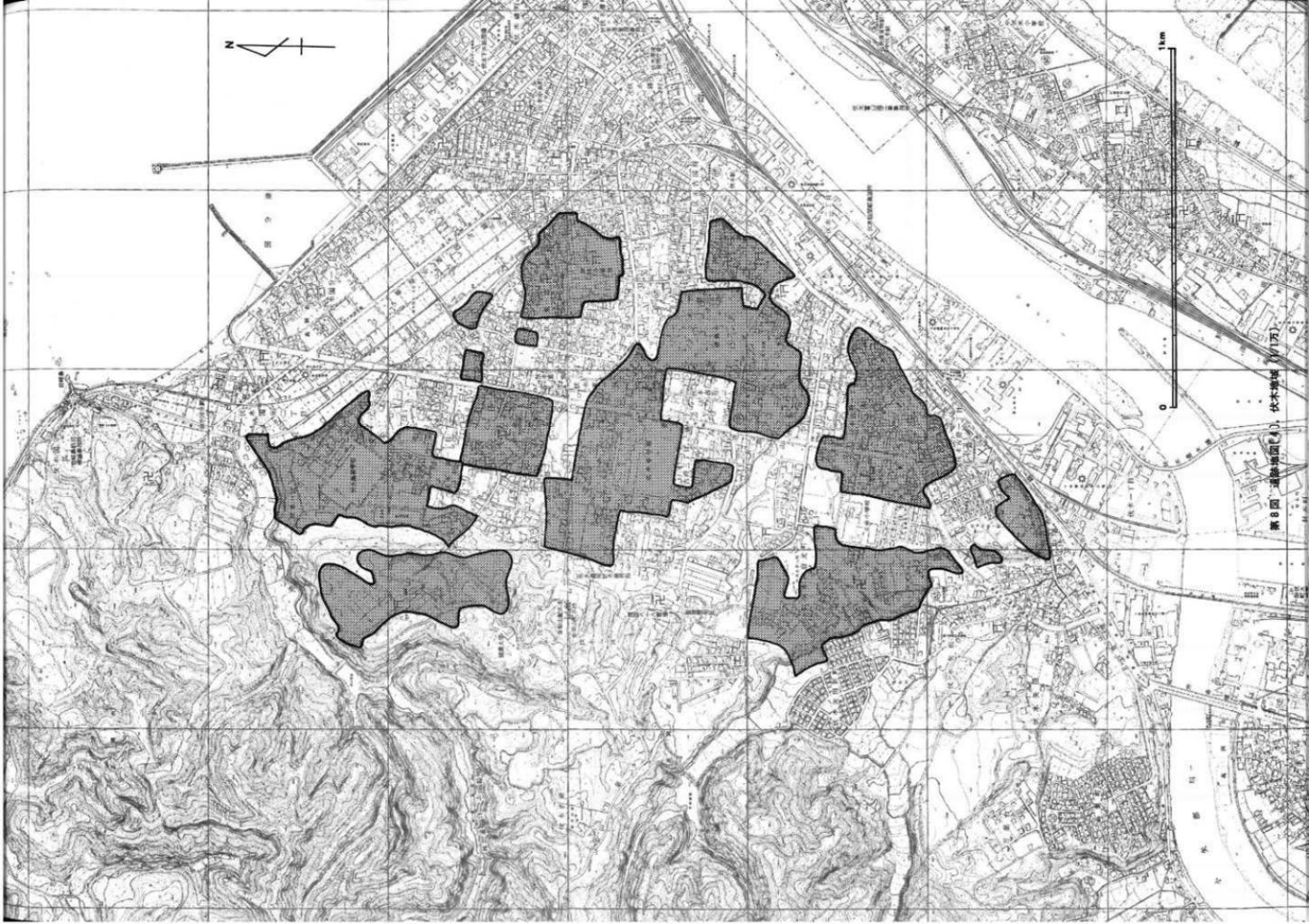
古瓦出土遺跡は、K 1 - 寺山遺跡、K 5 - 赤坂山遺跡の2箇所である。寺山遺跡は段丘の北部、氣多神社の北側に位置する。赤坂山遺跡は段丘の中央北寄り、氣多神社の南側に位置する。土器の散布地はこれらの遺跡を取り囲むように分布している。氣多神社境内地での出土を確認している他、段丘の裾部でも土師器・須恵器がまとまって採集されている。

この地区は、延喜式内社、越中一之宮氣多神社が鎮座する台地である。この神社の変遷とのかかわりも考慮して、遺跡の内容を把握して行かねばならない。

北部台地

北側は加古川の侵食谷に面され、北側から東側にかけては、段丘崖が走り、海岸平野と明確に区別される。南側は、赤坂侵食谷が東方より西方へ向けて入り、向きを北西方に変え、国分寺跡方面へ向っている。西側は上位段丘が位置している。

古瓦出土遺跡は、K 2 - 大北遺跡、K 3 - 大門遺跡、K 4 - 越中国分寺跡、K 7 - 大立遺跡の4箇所である。K 2 と K 3 は隣接しているので、便宜的に一つとすると3箇所の遺跡となる。すなわち台地北西部の大北・大門遺跡、中央南側の越中国分寺跡、南東部の大立遺跡となる。土器の



散布地はこれらの遺跡の範囲を超える。北側は段丘の裾部まで土器の散布が見られる。また、越中国分寺跡と大立遺跡の間の地区からも、4箇所ほど確認している。

この台地は、越中国分寺跡を中心とする地区である。越中国分寺跡は、過去数回の調査が行われているとは言え、規模・内容は不十分なものである。現在、一宮宇因分堂に単層宝形造の小堂があり、薬師堂と称されている。この薬師堂の境内地を中心に約1,538m²が県指定史跡越中国分寺跡とされている。

中部台地

北側と南側は、それぞれ赤坂侵食谷と古府侵食谷によって区画されている。東側は段丘崖を隔てて小矢部川の沖積地となる。西側は上位段丘となる。

古瓦出土遺跡は、K6--熊野遺跡、K8--大塚遺跡、K9--大友遺跡、K10--御亭角遺跡、K11--東館遺跡の5箇所である。K8~11の4箇所は隣接ないし接近している。この中の大友遺跡は、勝興寺境内で越中国庁推定地である。これらのまとまりを考慮して勝興寺周辺地区と呼称することにする。勝興寺周辺地区と熊野遺跡との間には、侵食谷の支谷が入り中部台地を2区分している。以上のことより、台地西側の熊野遺跡と東側の勝興寺周辺地区となる。土器の散布地は両地区を中心にこれらの中間点にも広範囲に認められる。伏木中学校の校庭造成等においても、かって土器が出土したことである。

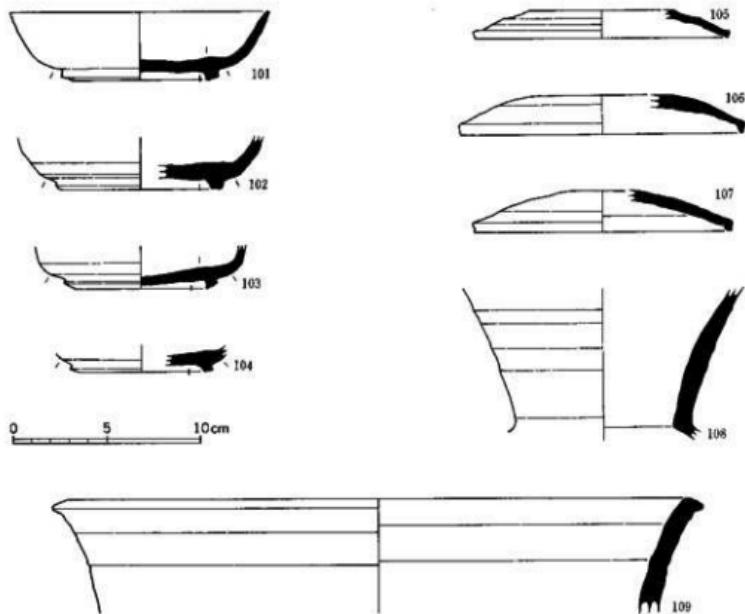
この台地は、越中国庁推定地の勝興寺を中心とする地区である。南側一帯は白鳳時代前期頃の瓦が出土することで知られている。このことから国府成立以前の寺院跡（御亭角庵寺）の存在が指摘されるに至っている。勝興寺周辺地区的調査は過去数回行われているが、遺跡の具体的な内容を把握するには至っていない。

南部台地

北側から東側にかけては、古府侵食谷が入る。南東側は段丘崖となっている。南西側は矢田侵食谷によって区画されている。

古瓦出土遺跡は、K12--白山遺跡、K13--鍵取遺跡の2箇所である。前者は台地中央部、後者は東部に位置する。土器の散布状況は次の通りである。白山遺跡では古瓦の分布範囲を大きく超えて散布しており、台地の裾部にまで及んでいる。鍵取遺跡では古瓦の分布範囲を若干超える程度である。これら以外に台地の南端部において2箇所の土器散布地が所在する。これら4箇所の中央が大きな空白となっている。古府小学校と十條製紙社宅が大部分を占め、土器の散布状況が確認できない状態のため、この部分も注意しなければならない。

この台地上には、かって古府古墳・首塚古墳・千人塚古墳・矢田窪古墳で構成される古府古墳群が所在していたが、今は消滅して見る影もない。古府遺跡と称されている土器散布地もこの台地上である。上記の白山遺跡は白山経塚を含むものである。この経塚は、平安時代後期～鎌倉時代のもので、和鏡4面等が出土している。



第9図 須恵器実測図 (1/3)

4. 遺 物

今回の分布調査で採集された遺物は、土師器、須恵器、珠洲、瓦、土鍤等である。土師器は古代末～中世のものも含んでいる。須恵器のみ第9図に実測図で示した。

第9図で9点図示した。内訳は、杯4点 (No.101～No.104), 蓋3点 (No.105～107), 瓦1点 (No.108), 瓢1点 (No.109) となる。杯はいづれも高台付杯で、底部の切り離し手法はヘラ切りである。No.101・No.103の底部内面には仕上げナデが認められる。蓋は杯蓋で、口端部は下方へ短かく屈曲する。

土師器は残存状態が良好でないので図示しなかった。手法が確認できるものでは、底部に糸切り痕を止めるものが多い。台付小皿の破片もある。

上記の土師器・須恵器は奈良・平安時代のものが中心であるが、中世のものとして、土師器皿・火桶、珠洲が採集されている。

IV 結 語

太田地域

海岸に沿って延びる砂丘の背後から山麓にかけて、条里制の存在が指摘されている。この水田地帯を取り巻くように、山麓に遺跡が拡がっている。山岸西・山岸・旦保の各遺跡である。採集土器が細片のため時期を明確にできないが、一応古墳時代～平安時代のものと把握した。太田地域の東部を占める丘陵地帯には、海に臨むようにして、桜谷・岩崎・国分山の各古墳群が立地している。また、この丘陵を刻む谷に臨んで、旧石器や縄文時代の遺跡が立地している。

伏木地域

勝興寺周辺地区での数回にわたる発掘調査、分布調査採集遺物、過去の知見等を総合して考えると次のことが言えよう。土器・瓦を中心とする出土遺物は、奈良～平安時代中頃のものが主体を占める。これは言うまでもなく、国府・国分寺をはじめ国府関連遺跡の存在を示すものである。次いで多いのは、平安時代後期頃から中世の遺物である。戦国時代の遺物が出土することについては、この時期の城郭との関連を考慮しなければならない。一方奈良時代以前のことについては、古いものとして、縄文時代の土器・石器の出土が認められる。弥生時代はやや不明確ながら、古墳時代初頭頃の土器をはじめ、白鳳時代頃の土器・瓦等まで、量的に多くはないが出土が知られている。古墳群の存在と相俟って、何んらかの形で遺跡が存在していたものと思われる。

古代越中国の国府・国分寺が伏木台地に所在したことは確実なところである。奈良・平安時代の遺物散布地は第8図に示したように台地の大部分に及んでいる。今後さらに拡がる可能性がある。伏木台地では、縄文時代以来、各時代の遺跡の所在地となってきた。この中で主要なものは、奈良・平安時代であり、越中国府関連遺跡と称している。これについては、①国府・国分寺の存在、②台地の大部分が埋蔵文化財の包蔵地であること、③遺跡の中心が奈良・平安時代であること、④古瓦出土遺跡が広範囲に認められること、⑤地形的に独立していること、等より、国府・国分寺と直接の関連を有する遺跡として、伏木台地の遺跡を把握することは、調査研究・保護にとって有効なことと言えよう。このように、作業仮設として国府関連遺跡を限定して、内容の把握に努めようと考えているところである。

今回の調査対象地は、古岡英明氏、西井龍儀氏が永年にわたり踏査され、調査研究を続けてこられた地域である。現地調査及び報告書作成に当たり、種々御教示をいただいた他、その学問的成果を使用させていただいた。最後に新めて感謝の意を表する次第である。今年度の調査は踏査が不十分な所も多く、今後何んらかの形で補完して行きたい。

参考文献

- 大村正之 1925 「桜谷古墳群」『富山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第7号 富山県内務部
京田良志 1972 「寺跡・経塚・磨崖仏・建物跡など」『富山県史一考古編』富山県
酒井重洋 1983 「富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書」Ⅱ 富山県教育委員会
坂井誠一他 1979 「角川日本地名大辞典」16—富山県 角川書店
高岡徹 1983 「小矢部川河口左岸台地の『館』・『立』地名について」『かんとりい』No.7 越中の歴史
と文化を考える会
富山県教育委員会 1967 「越中国分寺とその周辺の遺跡調査報告書」富山県教育委員会
西井龍儀 1983 「二上山周辺の古墳」『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』高岡市教育委員会
西井龍儀 1983 「御亭角遺跡出土の瓦について」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5
次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
西井龍儀他 (北陸古瓦研究会編) 1987 「北陸の古代寺院—その源流と古瓦」株書房
林喜太郎 1924 「氷見郡太田村太田岩崎古墳調査報告」『富山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第5号
富山県
藤田富士夫 1979 「伊勢須国造に関する一考察」『富山史壇』72号 越中史壇会
藤田富士夫 1981 「富山県における群集墳期の古墳文化」『富山史壇』76号 越中史壇会
藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡」13—富山 保育社
古岡英明 1951 「越中国分寺創設に関する一考察」『研友会誌』富山大学科学教育研究室
古岡英明 1956 「昔の伏木」資料『伏木の文化』伏木小学校
古岡英明 1960 「勝興寺附近遺存の涅槃について(前)(後)」『越中史壇』第19・20号 越中史壇会
古岡英明 1967 「越中国衙址推定地発掘調査概報」『富山史壇』第36号 越中史壇会
古岡英明 1972 「古墳時代」『富山県史一考古編』富山県
古岡英明 1983 「伏木地区の古代瓦出土地と、その歴史的背景-御亭角遺跡を中心に-」『富山県小杉町
・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
古岡英明 1985 「越中佛教の創始期について—御亭角庵寺を中心に—」『富山史壇』第86・87合併号 越
中史壇会
増川善明他 1973 「太田一歴史と風土—」太田郷土誌発刊委員会
和田一郎 1959 「高岡市史」上巻 青林書院新社

圖版一 遺跡（太田）



1. 山岸地区遠景（東）



2. 山岸西遺跡遠景
(北西)



3. 山岸西遺跡近景
(北)

圖版二
遺跡（太田）



1. 山岸地区遠景（北）



2. 山岸遺跡遠景（東）



3. 山岸遺跡近景（北）

圖版三 遺跡（太田）



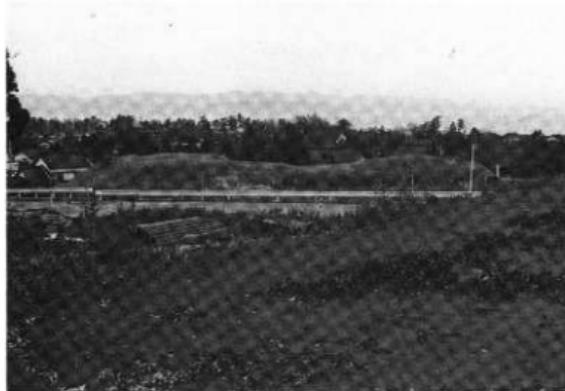
1. 旦保地区遠景（南）



2. 旦保遺跡遠景（西）



3. 旦保遺跡近景（東）



1. 桜谷1号墳（南）



2. 桜谷2号墳（東）



3. 国分山古墳群（南）



1. 伏本地域遠景（西）



2. 伏本地域遠景（南）



3. 上位段丘遠景（東）

圖版六 遺跡（伏木）



1. 寺山遺跡近景（南）



2. 氷多神社社殿（東）



3. 氷多神社参道（東）



1. 越中国分寺跡（北）



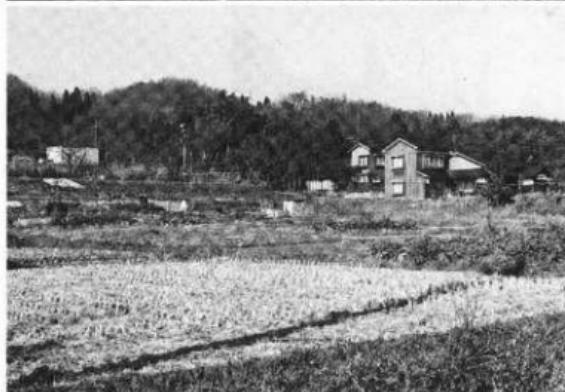
2. 越中国分寺跡（北）



3. 越中国分寺跡（東）



1. 藤興寺遠景（南）



2. 熊野遺跡近景（南）



3. 熊野遺跡近景（西）

高岡市埋蔵文化財調査概報第2冊
西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報IV

1987年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市庄小路7-50
印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利原町3

